

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(39)

ことごとくに

悲しかりけり

むべしこそ

秋の心を

愁へといひけれ

(『千載集』藤原季通)

折に触れて、全てが悲しく感じられる。なるほど、だから秋の心を「愁え」と言うのだな。

今年も「稲刈月」を迎えました。さわさわと黄金色に波打つ稲穂を前にして、豊かな大地の恵みを実感します。

夏の暑さが和らいでくると、吹き抜ける風にもまた秋の訪れを感じます。それは、熱く高ぶっていた心を落ち着かせてくれる。「一服の清涼剤」でもあるでしょう。日に日に秋の気配を感じ取りながら、服装と同じように、自分自身も少しずつ「秋の心」に変わっていきま

す。

ところで「秋の心」とは、どのようなものでしょうか。はじめに挙げた和歌には、「秋」という字と、「心」という字を重ね合わせると、「愁」になると詠っています。「憂愁」という言葉があるように、「愁え」(憂え)には「つらく悲しい」気持ちが含まれていて、秋風が身に沁みて、過ぎ去った夏を思い返し、移ろいゆく気色に切なさを感じる時もあるでしょう。秋は、何となく物思いに耽る季節なのかもしれません。

「愁え」には、「病」という意味もあります。先月号に、仏教では四百四種類の病があると書きました。この身体を含め、世界の全てを形づくる「四大」(地・水・火・風)には根つことなる四つの

病があり、そこからそれぞれに百の病が生じていることから「四百四病」になるというのです。

ところが、これら「四百四病」に入らない病気があることを知りました。それは「四百四病の外」と呼ばれる「恋の病」です。

恋しさ故に起こる「恋煩い」は、決められた範囲の中に抑え込むことのできない、人間ならではの感情と言えるでしょうか。

玉葛

花のみ咲きて

成らざるは

誰が恋ならぬ

吾は孤悲念を

(『万葉集』巨勢郎女)

(花だけ咲いて実がならない玉葛のように、口先だけなのは、どなたの恋のことでしょうか。私はあなたをこれほど恋しく慕っていますのに)

この歌には、「恋」に「恋」と「孤悲」の二通りの漢字が当てられています。自分の恋心(孤悲心)には、相手を思い遣り「孤り悲しむ」という心情が表さ

れているのかもしれない。目の前にいない相手を求めると、同時に一人の寂しさも溢れ出してくるのでしよう。

恋は、男の恋愛ばかりを指すものではありません。土地や植物、季節などを慈しむ思いでもあり、それは仏様を慕う心とも結び付いています。

昔、仏が亡くなった百年ほど過ぎた頃、インドに優婆曇多という聖者が「悟った人」がいました。かつて天魔のために御恩を施したことがあり、それからというもの天魔は「どんなことでも命じられるままに恩返しをした



秋風に吹かれるススキの合間より富士を眺める(撮影・高岡輝幸氏)

折り折りの記(73)

波多野 重雄

鳴神の大樹大墓碑大雷雨

今年が高野山で弘法大師開創千二百年記念大法会が、五月二十一日夢魔成満された。比類無き山上伽藍を築き、一大宗教都市とし、世界遺産となる。

私は炎天下、大師御廟に向かひ、突如雷神雷雨に襲われ、七百年杉に雨宿り。樹下の二十万基の供養碑等も一掃。忽ち晴天。信玄と謙信の供養碑、中の橋より芭蕉の詠んだ「父母戀」の句碑など見て御廟橋を渡り、大師の奥之院御廟に額突く。四海和平の思いを胸に下山。

(高尾山健康登山親睦会々長)

厚木市 荒井 一雄

いつ来るも

変はらぬ慈悲ぞ 聖観音

解脱に救ひの手さしのぶる

秋、座間に遊ぶ

暮色、翠嵐(山に立ちこむる緑の気)を包み、

参詣す、妙法山

(星谷寺)を...

蝉声(せみの声)、

すでに絶え、蝉声(こぼろぎの声)、勢ひ高く、

明月、井上(井戸の上)

を照らす...

を照らす...

富士登拝修行発足式

八月二十二日早朝、今回で第九箇所を迎える富士登拝の修行者と、見送りの山内職員による発足式が執り行われた。午前四時半より大本堂に於いて、修行満足と道中安全を祈願する大護摩供が、大山御貫首大導師のもと行われた。その後、奥之院裏手にある浅間社において、法楽をあげ、願文の読み上げの後、菅谷執事長より、先達への梵天袈裟が授けられ、登拝修行者達の無魔成満を祈って山内職員が見送った。



大山御貫首はじめ山内職員と修行者一同

先ほどの約束を忘れて、知らず知らず涙がこぼれ、大声を上げて泣き叫んだのでした。

(『十訓抄』)

聖者は、日頃から仏様に会いたい思いを募らせていました。時には「孤りの悲しみ」も抱いたでしょう。天魔が似せたものと知りながら、お姿が立ち顕れた瞬間に、感激の涙にむせんでいます。

聖者の「恋心」は、神仏を求め祈る「乞い心」とも通じ合っていたのです。心に恋慕を懐き、

私を渴仰して、便ち善根を種ゆべし。

(『法華経』寿量品)

(恋い慕う心を持ち、仏を深く信じ仰ぐ。それは善いことを招くものになる)

彼岸花が咲いて、朝夕に涼しさを感じます。「恋の病」に処方箋を求めても、神仏への篤い「恋の心」は、いつまでも癒えることなく持ち続けたいものです。

(栃木北部教区普濟寺中)

